



85. ミズダコ

Octopus (Enteroctopus) dofleini
(Wülker)

図版34

英名 North Pacific
giant octopus

露名 ギガントスキー オシミノグ
гигантский осьминог

地方名(北海道) オオダコ、
シオダコ(雄)、

マダコ(雌)

漢字 みずだこ みずだこ たこ
水蛸、水蛸、章魚

【形態】 タコ類の体は、
がいとうまく外套膜* (胴部)、頭部、腕
部(足)に区分される。漏
斗*のある側が腹面。

ミズダコの胴部は卵円形
でやや縦長、表皮が柔らか
くたるむ。多数のとがった

いぼ疣が連なった不規則な縦*じわは、背面で顕著。背面の眼上に筋肉質の突起が3~4個あり、眼の後方にある1つは四角く大きい。漏斗器*には幅広いW字形の模様がある。

腕の表皮は外套膜と同様に柔らかくたるみ、腕と腕との間の付け根部分に、きんまく傘膜と呼ばれる膜が広がる。8本の腕の長さはほぼ同じで、体の全長*の7~8割。腕の先は著しく先細る。吸盤は1つの腕に250~300個あり、腕の付け根から数えて第8~14対目で大きく、その最大径は雄の方が大きい。胴を手前にして背面を見て、体の中心線から順に、右側の腕であれば右第1~4腕という。雄の右第3腕は交接腕*で短く、その先端約15%の部分がぜつじょうへん舌状片*となる。これには吸盤がなく細長い円筒形で、縦に深い溝があり、溝の内側には白い多数の横条がある。ミズダコの舌状片は、マダコ類のなかで特異的に長い。さいよう鰓葉*数は25前後。

体色はレンガ色から茶褐色で、淡褐色の網目状斑^{はん}がある。それらの色は腹面の方が淡い。生時には周囲に合わせて体表の形状や体色を瞬時に、しかも多様に変化させる。タコ類では世界最大でふつう全長3mになり、北米では5mの記録もある。吸盤の数などの形質に地理的な変異があり、かつてはミズダコ、アマダコ、サクラダコなどいくつかの種*に細分されたことがある。

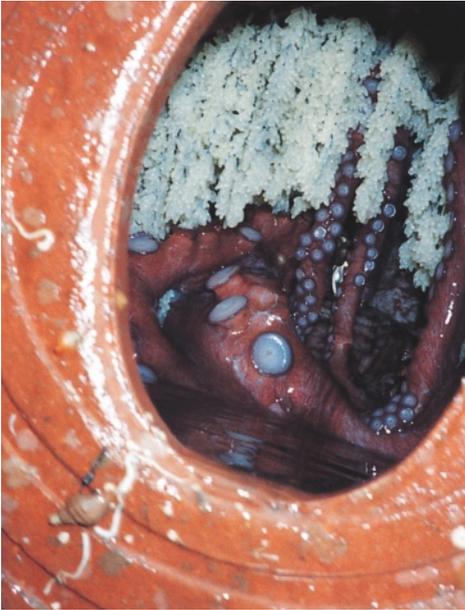
【生態】 日本、サハリン、千島列島、カムチャツカ半島、アリューシャン列島、アラスカ湾からカリフォルニア州の沿岸に至る亜寒帯域に広く分布。国内では北海道から日本海側では五島列島まで、太平洋側では相模湾や駿河湾^{すまがわ}まで分布し、土佐湾での記録もある。北海道では大陸棚*^{きがみ}^{すずろ}に分布し、水深1mに満たない潮間帯*から水深200m前後にまで広く生息する。

主に季節的に浅い所と深い所とを移動する。北海道北部日本海では春と秋には浅い所、夏には深い所へ、日高沖では夏は水深90m以浅、冬には水深150m以深へ、オホーツク海では夏と初冬に浅い所へ移動する。一方、津軽海峡を渡る群、オホーツク海や日高沖のあまり大きく移動しない群のほか、宗谷湾^{そうや}から留萌^{るもい}や増毛沖^{ましけ}に南下した例もあり、移動様式は多様で複雑である。

ミズダコは一生に一度だけ産卵する。雄が精子を雌に渡す交接*は、水深100mより浅い海底で行われ、その盛期は11～12月とされる。雄は10月ごろに体重が10kgを超えると性成熟*が進む。11月になると、中に精子がらせん状に詰まった精莢*^{せいきょう}という透明なカプセルが、陰茎^{いんけい}と呼ばれる器官に運ばれる。一方雌は、交接の時には性的に未熟*である。雄は交接腕の先端にある舌状片で精莢をつかみ、その腕を雌の胴内に入れて精莢を卵管に挿入すると、交接は終わる。通常、雌1個体に対して雄2～3個体が群がるようにして交接し、雄雌が1対1で交接するのはまれである。交接後、雄は沖合に移動して、5月ごろには体重が30kgにまで増加し、水深150m以深で死ぬ。

精莢は卵管内で溶解し、精子はいったん、輸卵管球という器官に貯蔵される。その後、卵巣の成熟*は急激に進む。交接後の雌は産卵場所を求めて沿岸の岩礁^{がんしょう}地帯に移動し、6～7月に岩穴やひさしのある岩棚などに卵を産む。卵は産卵直前に雌の体内で受精し、糸状の柄の付いたサクランボ形の状態で漏斗から1粒ずつ産み出される。受精卵は、長さ8mm、幅3mmのナス形で半透明の白色。卵殻*^{ふじ}はキチン質で厚い。雌は腕の付け根にある小さな吸盤を使い、分泌物で卵を藤の花状に紡ぎ合わせて房をつくり、岩などに付ける。1つの房は200～300粒からなり、その丈は10cm前後。

雌は約2週間かけて5万粒ほどの卵を産み、ふ化するまで守る。絶えず卵の房を腕ですくようになで、ときどき漏斗から水流を送り、卵の表面をきれいに保つ。卵をねらった魚などの外敵が近づくと、それを腕で追い払う。卵



産卵礁に産み付けられたミスダコの卵

をふ化させた後の雌は衰弱が激しく、肝臓が産卵前の半分までにまで萎縮し、その後2カ月ほどで死ぬ。

北海道周辺では、水深30～70mに設置したセラミック製土管の産卵礁*への産卵例がある。また1994年には、羅臼沖の水深13mの岩穴で卵を保育する雌の行動が観察、記録されている。

ふ化までの6～7カ月間に卵は長さ、幅とも1mmほど大きくなる。ふ化幼生*は全長7～10mm、体重0.02～0.05g、浮遊生活に適した体形で、腕が相対的に親より短く、吸盤の数は腕1本に13～14個、

体は透き通りゼリー状の膜で覆われる。幼生は着底*までの2～3カ月間を表層で浮遊するらしいが、この間の生態はよく分かっていない。体重3～5gではすでに底生生活に入っている。海底では岩や石のすき間や貝殻などにすみ「なわばり」を持つようである。

成長はきわめて速く、飼育実験ではふ化直後の体重0.05gの幼生が1年で体重40gに、体重4gの稚ダコが1年2カ月で765gにそれぞれ成長した。魚類のうろこ、イカ類の平衡石*のような年齢を示す形質がタコ類には見当たらず、年齢を知る方法は今のところない。タコ類も平衡石を持つが、イカ類のような輪紋は見られない。このため標識放流*や漁獲物調査の結果から体重の年間増加量を推定し、成長式を算出している。これによると、ふ化後2～3年の間に体重2kg程度となり、3歳で14kg、4歳で30kg以上になる。

寿命は雄で4年半、雌で5年程度とされるが成長の個体差は大きく、成熟年齢、寿命には1～2年の幅があるらしい。また、ふつう成熟体重は約10kgとされるが、人工の産卵礁に産卵した雌の体重は7～17kgと幅があり、さらにこれより小さな交配後の雌や性的に成熟した雄がわずかだが発見されている。

貝類、甲殻類を特に好み、魚類、イカ類、ナマコ、ヒトデ、ホヤなども捕

食する。一方、トドやアザラシなどでは、体重3 kgほどの小型タコの捕食例がある。